

子どもを真ん中に保育を考えるVI

—もの・人・こととのつながりの中で—

○企画・司会 灰谷知子（お茶の水女子大学附属幼稚園） 指定討論者 川崎徳子（山口大学）

話題提供者 伊川千晶・田村郁（お茶の水女子大学附属幼稚園）

【企画趣旨】

子どもたちが帰ったあと、環境を整えながら、子どもの表情、つぶやき等を思い起こす。いったん深呼吸をしたり、教師間で語り合ったりしながら振り返るけれど、あの時の子どもの思いは何だったのだろうと曖昧なまま翌日を迎えることもある。保育が始まると再び、目の前の子どもが今表す思いに一生懸命向き合う。そのような日々を積み重ねて迎える長期の休みに、改めて一人ひとりのことを振り返ると、その時は点と点で捉えていたような出来事が、ふとつながりをもって見えたように感じることもある。

話題提供では、身の回りのもの・人・こととのつながりの中で表す子どもの姿を振り返る。そして、子どもの中で淡く、でも確実につながっていることを感じている教師の語りを通し、つながりの中で子どもを捉え直そうとする保育について考えを深めていきたい。（灰谷知子）

【話題提供 1】

「リップスティック作りたい！ 5歳児」

2学期の運動会明け頃、登園するなりA児が「リップスティック作りたい！」とやってきた。私はそれが何かわからず尋ねてみると、形や使い方を一生懸命に説明してくれる。スケートボードのような乗り物だということがわかり、まずは何で作ろうかと相談。自分がそれに乗ることを想定し、丈夫なものがいいというので、段ボールを持ってくると、自分で形を描き、ハサミで切り始めた。しかし、段ボール1枚では「まだよわい…」と言うので、2枚重ねてみるのはどうかと提案。すると、先ほど切ったもので型どりし、同じものを切って、2枚をガムテープで貼り合わせた。実際に触ってみて「これでいい！」と納得したが、次にどうやって動かすかに2人で頭を悩ませる。周りにいた子どもたちから「キャップでタイヤ作ったら？」とアイデアをもらうが、それで動くのかなと不安そうなA児。私も耐久性が低いだろうなと考えたが、何かいい材料はないかを探しに教材室に行ってみる。色々見ながら、ペットボトルの蓋、竹串、ストローが使えるそうというので、いくつか持ってきてみて、以前作った乗り物のタイヤを作ってみる。その時は軸の両端に1つずつのキャップだったが、「2つ重ね（合わせ）るといいかも！」とA児が言った。重さに耐えられそうに感じたが、軸自体が細すぎて、実際に乗ってみるとA児の重さでタイヤが段ボール本体にくっついてしまい、動かない。「隙間があるといいのかな」と私がつぶやくと、A児が「いいこと思いついた！」と、本体とタイヤの軸の間に大きめのストローをいくつか重ねてつけて隙間を作り、その下にタイヤの軸を装着。すると、手で軽く重みをかける分にはタイヤがスムーズに動いた。そこで実際にA児がそっと自分の身体を乗せてみた。しかし、その重みには耐えられずタイヤは動かなかった。

それを見ていた周りの子どもたちが、「この子なら乗っても動くのにね〜！」と新聞紙で作ったポケモンをリップスティックに乗せて動かして見せた。するとA児がハッとした表情で自分の引き出しのもとへ行き、前に自分で作った動物を持ってきてリップスティックに乗せて遊びだした。その後も友達と一緒に積木でお家や滑り台を作り、そこに人形を乗せたリップスティックを走らせて遊ぶことを楽しんだ。

作ることが好きで細かなところもこだわって作るA児。4歳児の時に担任としてA児と出会ったときは、教師を頼らずに黙々と自分で作ろうとする姿が印象的だった。私自身、A児との関係を築いていきたいと願いながらも、『自分で』というA児にどう関わっていこうかと悩むこともあったが、そんな姿も見守り寄り添いながら過ごそううちに、少しずつ作りたいものや欲しい材料を伝えてくるようになった。段々と作ったものを見せてくれたり、お店屋さんを開いて友達とも関わろうとしたり、少しA児の世界が広がっていったように感じ、安心して過ごせるようになってきたのかなと嬉しく思った。

変わらず、その後も作る過程は『自分で』という思いは強かったが、作ったものを通して友達とつながろうとする姿は増え、作ったものを友達にあげたり、作り方を教えたり、周りの友達を見て、自分も同じものを作りたいと仲間入りしたりすることも出てきた。そんな中、「先生と一緒に作りたい」とやってきたA児。自分で作るのは相当に難しいと思ったのだろうか。正直驚いたが、困ったことを相談してくるようになったのかなと思うと嬉しく、なんとか一緒に形にしたいと思った。結果的にはA児が思い描いたリップスティックにはならなかったが、意見を交わしイメージを重ねながら形にしていたことが、私にとっては嬉しい出来事だった。

『作っている』A児を見ていると、ぐっとものと向き合い、集中して作っていることがうかがえる。新しい環境に緊張感が高く、好きなことをじっくりする中で安心して過ごせるようにと関わってきたが、その中で周りの友達や教師を感じられるといいなと願ってきた。作ることを重ねていくことがA児自身の安心や自信につながり、少しずつ作ったものを通して周りの人とつながっていった。人と関わる楽しさを重ねていくことで、作ること以外にも色々な遊びに興味を示し、困ったときに人を頼りながら過ごすことにもつながっていったのかもしれない。一人ひとり、好きなことやものが異なり、思いの表現の仕方も様々で、その時の子どもたちと必死に関わっているときには、それがどうつながっていくのかは想像つかない。振り返ってみることで発見があり、もちろんわからないこともあるが、色々なことを感じ、考えている子どもたちって面白いなと思う心はこれからも大切に関わっていきたいと思う。（伊川千晶）

【話題提供 2】

「“リレーやりたい”と“おんぶして” 3歳児」

2学期終盤の12月、降園の時間が近づき、ほとんどの人が保育室に戻ってきた頃、B児がいないことに気がついた。園庭を見てみると、C児と一緒に年長児に混ざって、リレーの順番待ちをしていた。「帰る時間だよ」と言うと、B児が「まだ走っていない」と言うので、最後にそれぞれ1回ずつ走らせてもらって帰ってきた。翌週もB児は登園してすぐに「今日もリレーやりたいな」と言った。近くにいたD児が「Dもやりたい」と言ったのを聞いて、B児がD児に声をかけ園庭に出かけて行った。年長児の遊びのなかに入るのには緊張したようで、保育室に戻ってきたので、私も一緒に向かった。入ってみると、B児は緊張した表情をしながらリレーの白線にしっかり沿って走った。私は他の遊びに出かけ、しばらくしてからまた見に行くと、B児の緊張感はほぐれて「先生がいない間ずっと走ってたんだよ!」と誇らしげに言った。その後も数日間B児は友だちに声をかけて一緒にリレーに出かけて行った。それまでのB児は慎重な印象があり、入園当初から教師の近くで過ごし、初めてのことは様子を見てから始める面があったり、友達に誘われても教師の近くにいるために断ったりしていたため、年長児の遊びに自分から友達を誘って入っていったことは驚きだった。

一方で、同じ頃、教師との関わりでもこれまでと違う姿を見せていた。教師に「おんぶして」と求めることが増え、教師が他の人に関わり、B児に抱えられないと、怒った表情でその人を押すなど手が出ることもあった。それまで楽しい、嬉しいといった感情を表すことはあっても、怒ったり泣いたりすることはほとんどなかったため、B児の表し方に驚いたが、自分を見てほしいという思いを強く感じ、できる限り応えていた。

年長児のリレーに飛び込んでいく姿と必死に自分を出す姿、どちらも初めて見るB児で、どう関わろうか迷いながら関わっていた。同じ日でもB児が見せる姿は場面によって大きく異なり、ギャップを感じたが、同時に表したことが興味深かった。2学期が終わった時、B児はこの時どんな心持ちでいたんだろうと、これまでの幼稚園での姿を振り返りたくなった。

入園当初から表情に意思はありながらも、自分を抑えている印象があったB児。B児と教師との関係の変化に影響したと感じるのがE児の存在だ。E児も教師の近くで過ごすことが多い人だったが、2学期初めから、教師を求めるようになり、だっこやおんぶができないと、怒って周りの人に手が出ていた。B児が譲らず身体の動きで抵抗することもあったが、教師はその時自分を出し始めたE児に必死に応えていた。12月のB児はこの頃のE児の表し方と似ていたため、E児と教師の様子を見て、教師に自分を出していいんだと感じたのかもしれないと考える。また、2学期、遊びの場面でもB児には変わっていく姿があった。遊びのなかで友だちと出会い、教師が離れても遊び続けることが徐々に増えていた。お家など遊びの場ができると、「お家に来て」と教師を呼びに来ていたのも、教師とのつながりを感じながら遊べるよう関わっていた。

そして、先述した2学期終盤の姿があった。この頃のB児の姿に共通していることは、自分と教師の1対1の

関係から、その外側に目が向くようになってきたということではないかと感じる。教師との関わりでは、自分以外の周りの人と教師の関係が見えて、自分を見てほしいという気持ちを表した。また、自分自身との関わりでは、遊びや人との関わりが開いていくなかで保育室から少し離れた場所でやっている年長児のリレーが見えて、興味をもった。これまでは教師や友だちに誘われて遊び始めることが多かったB児だが、リレーは自分で見つけて、選んで入って行った。慎重なB児にとって、年長児のリレーに自ら入っていくことは大きなことだっただろうと想像する。ありのままでいられる教師との関係が土台になり、自分で見つけたやりたいことをやってみようとして動き出すことができたのではないかと感じる。

3歳児は入園当初から、幼稚園が安心の場所になるよう、まずは教師との1対1の関係を大事にしてきた。自分の出し方は人それぞれ異なり、変わっていくタイミングも人それぞれだった。その中で教師との関係に安心すると、自分のやりたいことを見つけていく姿が多く見られた。振り返ると、B児も教師や周りの人との関わり方、遊びなどいろいろな面で少しずつ変わってきている。今のB児は、怒って周りの人と揉めたり、教師に手をかけてほしい様子があったりと、混沌としていて、遊びどころではない時間もあるが、この時間もB児にとっては自分と向き合い、育っていく大事な過程なのだろうと感じる。子どもたち1人1人のその時の姿を受け止めていきたいと改めて感じるきっかけとなった。(田村郁)

【指定討論】

『子どもを真ん中に保育を考えるVI』の討論で大事にしたい言葉は「つながり」。ここでは、話題提供者の2人の保育者それぞれが、心に留まっている子どもの姿から、その時々保育を振り返り、記述し、場面を思い返しなが語り合う中で、「つながり」から見え描き出されてくるものとその意味、様々に形を変えながら子どもの育ちと捉えられるような体験の様子やその質的な豊かさや変化、あるいは、保育者が願い、見通してきた思いや子どもと過ごした世界があることが現わされる。そして、それらは、外から触れていく私たちも味わえるもののようである。この私たちが感じることも含め、子どもが向き合っているもの・人・こととともに保育者が迷いうごめく世界の保育的な意味、保育の場だからこそ叶えられる大切な時間があることを、語り合う過程の中で一緒に考えていきたいと思う。

保育研究者であり実践者でもあった津守真は「子ども学のはじまり」(1979)の中で、「保育実践における保育者の態度は、子どもと共にあり、そこで起こっていることをそのまま感じとることのできる実存的な態度」であると示す。また、「そこで心で感じたものを、もう一度とらえ直して、そのことの意味を問う作業をすることに、大人としての意味が生まれてきます」と記す。津守が伝えるものには、この時代だからこそ向き合いたい人と人が触れる中で育まれる保育の場の教育的な意義があること、その「心で感じたものを捉え直すこと」を話題提供者の表現から感じながら、子どもの育ちの姿とともに保育者のあり方をも思考する時間になるよう討論の中で迫っていきたい。(川崎徳子)